《古巻集具》

美術工芸資料館　館長　並木誠士

《古巻集具》全六巻（図一）は、明治三五年（一九〇二）秋に開校した京都高等工芸学校が、二年後の明治三七年十二月に図案科の教材として購入した資料のひとつである。

この時期の京都高等工芸学校図案科は、明治三五年にヨーロッパから帰国した浅井忠（一八五六―一九〇七）と翌三六年に同じくヨーロッパから帰国した武田五一（一八七二―一九三八）が揃って教育に踏み出した時期である。両教授がヨーロッパを視察して帰国していることからも、また、美術工芸資料館に収蔵されている数多いポスター類やフランス、ドイツ、ハンガリーなどの陶磁器類などの工芸品を見ても、初期の京都高等工芸学校の教育がヨーロッパのデザイン思潮の取り込みに主眼を置いていたことは明らかである。その背景には、この時期にヨーロッパを席巻していたアール・ヌーヴォーの動きがある。そのなかにあって、この《古巻集具》が購入された意味について考えてみたい。

まず、この《古巻集具》の概要を紹介しよう。

それぞれ別箱に入る六巻の巻物からなるが、表装、題箋の形式、箱ともに同一形式なので、セットで購入されたことは明らかである。それぞれの題箋には「古巻集具」の題字に続いて「衝立　棚　関　膳　臺物　飲食酒器　漆器」「硯箱　机　棚　懐紙　扇　団扇　火打袋　鏡　盥　細工道具　祭器」などが書き込まれている。各巻を開いてゆくと、実際にそれら器物が使用されている状況が平安時代以来の絵巻から抜き出されている（図二）。取材された絵巻は、《信貴山縁起》《伴大納言絵巻》《春日権現霊験記絵巻》《法然上人絵伝》など、いずれも現在では国宝、重要文化財に指定されているような作品である。つまり、古典的な絵巻をソースとして、日常生活で使用される様々な道具器物の類を一種の絵引き形式としてまとめたもので、おそらくは新たな絵を制作する際の手本ともなるものであろう。

この《古巻集具》が、江戸時代中期に寛政の改革を断行した松平定信（一七五九～一八二九）が作らせた《古画類聚》（図三）にならっていることは明らかである。直接の関係を示す資料は存在しないが、その形式や選択された場面から、両者の密接な関係が見てとれる。《古画類聚》は、国学や古典研究が盛んになった時期にあって、古絵巻から様々な場面や器物類を抜き出して編纂された一種のデータベースというべきもので、定信にとっては、古代の生活を知るための手がかりであったと考えられる。写し取られた作品はほとんどが現存する古絵巻で、やはり《信貴山縁起》《伴大納言絵巻》などいずれも各時代を代表する作品である。《古巻集具》は、この《古画類聚》の一部を写して、名称を変更したものである可能性が高い。なお、《古画類聚》および《古巻集具》の出典のなかに《三論絵》（酒飯論絵巻）が含まれている点についてはすでに論じたことがある（並木誠士『「絵巻」の時代から「風俗画」の時代へ　日本絵画の転換点　酒飯論絵巻』昭和堂、二〇一六年）。

興味深いのは、京都高等工芸学校がこの《古巻集具》を日本画家の守住勇魚（一八五四～一九二七）から購入しているという点である。勇魚は、江戸時代のやまと絵系の流派である住吉派の絵師であった父守住貫魚に日本画を学んだのち、明治九年に開校した工部美術学校で洋画を学んでいる。そして、この工部美術学校の同級生の一人が、のちに京都高等工芸学校の図案科教授になる浅井忠であった。浅井と勇魚は、ともに工部美術学校を中退して十二会を結成するなど行動をともにしている。また、この勇魚は、明治二八年から大正六年（一九一七）まで同志社で画学を教えており、この時期に京都高等工芸学校に出講していることもわかっており、一貫して浅井と深いつながりがあったことが推測できる。

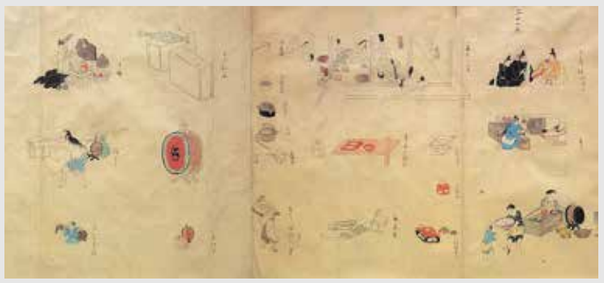
そして、京都高等工芸学校では、勇魚から《古巻集具》だけではなく、父の貫魚が模写した《法隆寺宝物之図》《正倉院蔵唐櫃模様図》、勇魚自身の《紫宸殿障子縮図》、筆者不詳であるが《諸陶器之写》《満州並阿蘭人（衣服）》などの絵画や「古土器模造」「燈籠鏃形」などの資料を購入している（和田積希「京都高等工芸学校における初期教材―明治後期における視覚資料について―」『美術京都』五〇号、二〇一九年）。これらがどのように教育に活かされたかは現時点では明らかにできない。しかし、いずれも日本の古代から江戸時代までの絵画・工芸やそれらの装飾や文様を写し取ったものであり、これらが図案科において参考資料として用いられた可能性は高い。なお、京都高等工芸学校の開校時には、漆器や甲冑類など日本の古美術の実物資料も購入している。これらは主としてスケッチの対象となったことが生徒作品から明らかである（並木誠士「京都高等工芸学校収蔵の日本美術資料―漆芸品を中心に―」山野英嗣編『東西文化の磁場―日本近代の建築・デザイン・工芸における境界的作用史の研究』国書刊行会、二〇三年）。

守住貫魚、勇魚父子は、おそらくは住吉派の絵師の必修ともいえる古典学習の一環として古画に接する機会は多かったと考えられる。そのときに《古画類聚》のような今日で言うところのデータベースを見る機会もあっただろう。その守住家に蓄積されたものが、日本の伝統的な文様を伝える資料として浅井の目にとまったとは考えられないだろうか。このことは、浅井がヨーロッパからのデザイン思潮の受容につとめながら、他方で日本の伝統的な絵巻類からも図案の題材を収集しようとしていたことを示している。明治時代の後半には、染織図案においていわゆる「古代文様」が流行するが、そのような流行に沿った図案を生み出すためにも、勇魚から購入した資料類が活用された可能性は高い。

初期の京都高等工芸学校では、アール・ヌーヴォーに代表されるヨーロッパの動きを取り込んでいることが強調されがちであるが、じつは、日本の古典にも目を向けていたことがこれらの資料から明らかになる。

図一　《古巻集具》全六巻

図二　《古巻集具》巻一（部分）



図三　《古画類聚》「集古十種」古画器財二三（部分）